

VII. ボランティアセンター研修会

平野ボランティアセンター長講演会

「立教大学におけるボランティア活動を考える」

日 程:2020年12月14日(月)

場 所:立教大学新座キャンパス7号館2階会議室

講 師:平野 方紹(立教大学ボランティアセンター長・立教大学コミュニティ福祉学部教授)

参加者:立教大学ボランティアセンター

中川 英樹(副センター長、立教大学チャプレン)

【ボランティアセンタースタッフ】

佐藤 一宏、阪下 利哉、松村 郷士、茅 芙美、広瀬 かおり、小幡 彩子、増田 由紀

大学で何を学ぶのか

私が立教大学に赴任したのは2012年のことです。

翌年の2013年からボランティアセンターで業務を始めましたので、それから、8年間、活動してきました。当時の学部長からお声がけいただいたときには、お手伝いをするぐらいの軽い気持ちでいたのですが、そこから深みにはまって今日に至りました。個人的には、佐藤課長はじめスタッフに恵まれたことが何よりの幸せでした。私が何もなくても、スタッフが仕事を回してくれる。そのおかげでここまで来られたと感謝しております。

これから4つお話をします。まず、「大学で何を学ぶのか」です。今年はコロナ禍で、4月から大学らしい学びができなかったのが正直なところですが、実はそのおかげで、「大学とは何なのか」を改めて考える機会になったと思っています。一般的には、大学は勉強して知識を身につけるところです。それだけの場所であるなら、我々教員は、教えるべきことを効率よく効果的に伝えるための授業技術を向上させればいいだけの話です。それはオンラインであっても同じです。でも、ほとんどの学生から、当たり前の大学生活が送れていないという不満の声が寄せられました。それは、友達と話したり、色々な活動をしたたりすることができないのはおかしいというわけです。授業料の問題は別にして、ただ覚えるだけの勉強だけすればいいのなら、こんな文句は出ないはずで

問題は、「当たり前の大学生活ができない」ことでした。

一体この大学生活とは何なのでしょう。私は、大学の学びは講義やゼミに限るのではなく、仲間との交流や課外授業も含めた、その全てから得られるものだと考える必要があると思います。学生たちにとって今の状況は、一方的に受け取るだけで自分から考えを発信したり共有したりすることができず、受身の学びになってしまっている。だから強い不安や不満を覚えています。

確かに社会的な器という意味では、大学は学問研究をする場所です。マクロ的な視点から見ればそうですが、ミクロ的な視点、つまり学生一人ひとりから見てどうなのかを考えていかないと、やはり学生たちは息が詰まってしまいます。

そこで、このミクロ的な視点で考えてみることにします。学生の多くは、大学をライフステージの1つと考えています。大多数の学部生は、10代から20代前半に入ってきます。では、高校までと大学の違いは何なのかといえば、自分と社会との関係が問われる点にあります。小学校から中学校でも大きな変化がありますし、中学生が高校生になるのも大変です。でも、そこで「きみはどんな人間で、将来何を仕事にしたいの」と聞か



平野 方紹センター長

れることはあまりありません。大学で何を勉強するのか、何を志すのかは、将来どうするのかに直接つながってゆきます。私は、立教の中でもコミュニティ福祉学部福祉学科という専門がかなり絞られたところにいます。もちろん福祉学科の全員が福祉に進むわけではありませんが、学生たちは、ある程度、将来何を指すかを考えて入ってきています。教員養成系大学や医学部や看護学部を志す学生も、自分は社会で何をするかイメージは持っています。大学院に進む場合の専攻選びも、将来のしたいことと結びついています。大学は、単に次へのステップではなく、「自分が社会でどう生きるのか」、「自分が何者か」を問われる場なのです。

今の社会は、ラベルで人を判断します。私は自己紹介で立教大学に勤めています、社会福祉を教えていますと伝えます。そうすると、社会はそれで私という人間を判断します。立教生たちにしても、立教大学の何学部何学科ですと言うと、社会はそれでわかった気になります。でも、よく考えてみれば、仮に福祉学科の3年生とすれば150人はおり、それぞれ違う人間のはずなのに、世の中は「立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科」というラベルだけでわかったような気になってしまいます。良い悪いは別として、自分がどういう人間なのか、外からのラベル付けで決まってしまう部分があります。こういう状況ですから、学生は一人ひとり、大学という場で、自分は何者で何をしようとしているのかの問いに答えを出さなければなりません。実はこれ、就活のエントリーシートの必出テーマです。裏を返せば、このことをはっきりしてこいと社会から求められていると考えられます。

立教大学とボランティア活動

では、社会と自分が問われる大学でボランティア活動に携わるとするのは、学生にとってどんな意味があるのでしょうか。また、そこでボランティアセンターが果たす役割とは何なののでしょうか。

それを考える前に、まず立教大学でのボランティア活動の始まりを振り返ってみましょう。歴史を紐解きますと、一番古い記録は、1923年の関東大震災時にまでさかのぼります。東京が被災地となり、チャペルを中心として学生たちが救済活動を行ったというのが、大学の公式記録の中で残っている最初の学生ボランティア活動です。実際には、それ以前にもチャペルを中心に、文京区付近にあったいわゆるスラム街で、同じ聖公会グループの滝乃川学園と一緒に奉仕活動を行っていたという断片的な記録があるなど、もっと古くから活動はありました。大学生のボランティア活動ということに着目すると、同時期に東京大学などで、いわゆるセツルメント活動(宗教家や学生などによる社会の下層に属する人々への社会事業の1つ)が始まっていました。大学セツルメントという形で、問題意識を持った学生たちが集まって地域で活動していました。これは学生自らが始めて自主的に活動するもので、大学はあまり関与していませんでした。それと比べると、立教では、チャペルが中心ですが、大学が関わっていくという明らかな違いがありました。これは立教の独自のあり方で、大学として全学的に取り組んでいくスタイルを昔から持っていたというのが、立教のボランティア活動の系譜で重要な点です。

これは触れておかなければならないことですが、立教大学には残念な歴史があります。

第二次大戦中、軍国主義に吞まれて一時キリスト教精神を放棄してしまったことがありました。戦時中には、池袋のチャペルが徴用されて漬物置き場にさせられました。第二次世界大戦が終わって、立教大学も復興に向かうのですが、その復興においては、戦争で投げ打ってしまった建学の精神を取り戻すことから始まりました。その動きの一環として、ボランティア活動や奉仕活動がきちんと位置づけられました。キリスト教精神を取り戻すだけでなく、チャペルの復興と合わせて、具体的な実践活動として取り組むものとして進められたのが、立教のボランティア活動の特徴です。

時を同じくして、昭和30年代に学生が自主的活動としてボランティア活動を始めていました。そして、これも立教ならではの特色ですが、現在の学生部が主導してさまざまな活動を展開していきながらもボランティア活動が広がっていきました。チャペル、学生、学生部の3つの動きが母体となって、まずはチャペルがボランティアセンター的な役割を果たしながら、学生部も正課外教育プログラムとしてもさまざまな社会活動が実践されていきます。

ここで大学全体のボランティア活動をまとめるものが求められ、この3つを束ねるものとして、2003年に立教大学ボランティアセンターが創設されることになりました。立教大学ボランティアセンターは20年ほど前に突然できたものではありません。我々の活動は、1世紀以上にわたってチャペルが築き育んできたボランティア活動、学生の自主的活動と、大学が全学的に取り組んできた正課外教育活動の3つを継承しています。

実際、ボランティアセンターの活動には、この3つの要素が今でも息づいています。立教大学ボランティアセンター自体の歴史は20年弱ですが、100年以上の歴史を背景にしていると思っています。

ボランティアセンターの機能と役割



そんな立教大学のボランティアセンターの活動の具体的な特徴は何なのでしょう。立教大学は 2014 年に、ボランティア活動を推進し、さまざまな発信をしていることが功績として認められて、厚生労働大臣表彰を受けました。ボランティアセンターとして受賞しているのは、関東地区では3校だけで、全国でも4校ほどしかありません。対外的に見ればすごいことなんですけれども、立教のカラー、学生もそうですが、自分たちの成果をアピールすることが苦手です。

受賞した他大学、例えば、早稲田大学では、ボランティアは大学の社会活動という位置づけで、教育スタッフが中心になってリードしています。また、淑徳短大は、長谷川良信という大正時代に仏教系のセツルメントで活躍した有名な人が創始者で、その流れをくんだ大学の理念があり、ボランティア活動は理念の実践として、やはり教員のリードで行われています。

立教も大学がリードする部分は持っていますが、この2校とはちょっと違うところがあります。それは、ボランティアセンターには、ただ学生たちをまとめて引っ張っていくスタイルには収まらないということです。

それは何かと言うと、私は3点挙げられると思うんです。1つは、「寄り添い型支援」です。

これの最たるものが「一貫連携教育・立教学院清里環境ボランティアキャンプ」です。私が初めて清里環境ボランティアキャンプに参加した 2013 年は、まだトップダウン方式でした。企画や運営は教職員が全部決めて学生リーダーに伝え、学生たちが実行して、小学生、中学生、高校生を引っ張っていく形でした。3日間のキャンプでは毎晩、翌日に何をするかとの打ち合わせが行われますが、そこに学生は入っていませんでした。学生は色々な作業をするのですけれども、教職員に指示と判断を仰いで従事することが主な役割でした。

それが、2014 年に変化が生じます。学生たちの方から、夜の打ち合わせに自分たちも参加したい、具体的に何をするかも自分たちも一緒に決めていきたいという希望があり、以降は教職員と学生で運営を決めるスタイルになりました。今はさらに進んで、教職員は学生リーダーたちのサポートが主で、学生が主体性を発揮するキャンプへと進化を遂げています。もちろん、これは歴史的な積み重ねがあつてのことで、過去が悪かったということではありません。学生たちを「駒」として使うのではなく、自分で考えて判断できる環境を整える「寄り添い型」のアシストに変わってきていることの一つの現われです。

もう1つは、「協働型支援」です。ボランティア活動に取り組んでいる大学のほとんどは、個々のサークルを応援する個別支援型の支援がメインです。立教の場合は、佐藤課長の功績だと思いますが、「ボランティアサミット」を開催して、様々なボランティアサークルがそれぞれ自分のところだけで考えるのではなく、みんなですぐすばいいのかを考える協働型のボランティア活動ができるように支援しています。

全体で共有することで、視野が広がるという大きな意味があります。さらに、「ボランティアオリエンテーション」があげられます。今年ではできませんでしたが、新入生歓迎時に各サークルの勧誘ですが、基本は新入生を取り合うというか、何とかして自分のサークルに入ってもらおうと勧誘をするわけです。ところが、ボランティアに関しては共同でオリエンテーションを行い、1つの窓口で受け入れを行っています。これは大変画期

的なことです。考えてみれば、もともとボランティアとは協働して行うものです。そのコアの部分をととても大事にしてきた活動は、ここでも生きてきています。

そして3つ目が、「提案型支援」です。ボランティアセンターと学生の関わり方で、よく見られるのが「対応型アシスト」です。学生から、「こういう活動をしたいんだけどどこかいい場所ないでしょうか」と相談されれば、適切などころを紹介する。これが一般的な大学ボランティアセンターの基本的スタイルです。もちろんこれはこれで重要な機能ですが、立教では、加えて、提案型のアシストを実施しています。それが「ボラカフェ」です。学生から助言を求められたときに、こうなさいと即答するのではなく、幾つかの選択肢を提示して、最後はあくまでも学生に決めてもらいます。これは我々が行うどのイベントにも貫かれている基本姿勢です。こうあるべきだとか、こうしなければならぬと縛るのではなく、学生の可能性を広げる発信をしていく、この提案型支援が持つ意味は、大きいと思います。

そもそも、ボランティアを考えるときに、その前提として「ボランタリー」というものがあります。「ボランタリー」とは、自発的であること、あるいは自分たちの発想で行うことをいいます。ボランティア精神とも言えると思いますが、このボランタリーの心をもってさまざま実行している人たちがボランティアだと考えられます。となれば、ボランティアセンターとしては、ボランティア活動に導くよりも前に、ボランタリー、ボランティアの気持ちを育成する役割を担っていると思います。そのことは大学で学ぶことにもつながってくるし、自分がどう生きるのかの答えにもなっていくのではないのでしょうか。

まず「ボランタリー」というのが広い精神としてあって、その中の一角にボランティア活動をする人たちがいる。逆を言えば、ボランティア活動はしないけれども、ボランタリーな気持ちを持っている人たちをつくることも大切だと思っています。学生の中には、物理的・経済的な問題や時間的な制限などで、ボランティアをしたくてもできない人がいます。しかし、誰もがボランタリーな気持ちをもつ、ボランタリーな考え方を身につけて大学生生活に取り組んでいくことはできると思うんですね。

つまり、ボランティアセンターの役割はこのボランティア活動という限られたものだけでなく、ボランタリーの部分にかかわっているのです。立教大学全体で見れば、ボランティア活動に参加している学生の比率は3%から5%ぐらいだと言われ、これでも他大学よりは高いのです。しかし、この参加者数よりも、ボランタリーな発想を持っている人がどれだけいるかが重要です。立教はミッション系の大学だからといって100%がクリスチャンではありません。信徒ではなくても、キリスト教の精神や考え方に触れることにとっても意味がありますし、歴史的に見れば、チャペルボランティアも、その活動参加者数は大人数ではありませんでした。ただ、そういう精神を持った人たちが身近に存在したからこそ、立教のボランティアは育まれていったのです。今、立教でボランティア活動に携わっている人たちは、大学全体から見ればごく一部かもしれませんが、それでも、そこから伝わるボランタリー、それは「立教の精神」にも通じるものであり、その立教の学生みんなが備えてほしいものを通じて、自分が何者であり、自分はどうしたいかを考えることができると思います。

少し専門的な話になりますが、社会福祉法という法律では、社会福祉の担い手を2つに分けて扱います。1つは、「社会福祉を目的とする事業」です。つまり仕事としての社会福祉、それは、職業です。もう1つは、「社会福祉に関する活動」です。仕事としてはない形の活動です。例えば、企業の社会貢献活動、ボランティア活動、地域の助け合い活動などです。学生で言えば、学生の本業は勉強であって、サークルやその他の課外に行っていることを「活動」と言います。このようにして、法律は職業としての部分と、活動としての部分に分けて社会福祉を考えています。

ただし、両者はまったく別のものでなく、接点もあります。その具体例が「ボランティアコーディネーター」です。コーディネーターそのものは職業です。しかし、対象としているものは、「活動」です。学生からすればボランティアは本業、正課ではありませんが、ボランティアコーディネーターは「業」として携わっています。

個人的なことですが、私は大学で社会福祉を勉強して、その後24年間、公務員としてと社会福祉の仕事をしてきました。しょうがい者福祉、生活困窮者支援、老人福祉、ケースワーカーや行政としてかかわってきました。大学で教鞭をとる立場になってからもずっと社会福祉を教え続けています。その意味では、私はずっと社会福祉を「仕事」としてきました。その立場から言えることですが、意外なことに、福祉関係者はボランティアに対して理解はありつつものすごい反発を持っています。自分たちはボランティアではない、プロとして仕事をしているというのが福祉従事者の1つのアイデンティティです。確かに福祉はもともと慈善事業から始まり、その慈善事業はボランティアが起源ですが、福祉従事者としてはプロとして専門的な支援をしている、

そこにあるのは、隣人愛ではなく、プロだという気持ちがあります。ただ、現実には「活動」の部分があって、そこをどうバランスを取るのかというのが、実は難しい課題です。そこで鍵となるのが、プロでありながら、アマチュアの世界にかかわっていくコーディネーターという存在です。

わかりやすい例として、料理番組があります。料理を作ることは、どこ家庭でもすることです。でも、アマチュアとプロの世界ははっきり分かれています。レストランのシェフの出す料理と、家庭の料理とはまったくの別物です。では、家庭料理に関してプロはいないのかというと、確かにいます。テレビの料理番組を見ると、そこで扱うのは完全に家庭料理です。お店ではなく、家で作る料理を扱っています。でも、教えている人は、明らかに料理のプロです。三ツ星レストランのシェフが、自分はプロで、これはプロの料理だというのはわかります。でも、家庭料理でも、プロがかかわって、こうすればいいですよと教えることで、大きな違いが出てくる。だから、家庭料理で番組が成り立つのです。

ボランティアコーディネーターも本質は同じだと思います。確かに特に教えを請わなくても、みんながしていること、できることかもしれません。しかし、そこにプロの視点が入ることによって全然違ってきます。だから、私はプロとアマチュアとをすっきり分けるのではなくて、重なった部分がすごく大事だと思っています。プロには、アマチュアにかかわる仕事というものがあるんだと思います。誰もが取り組んでいる部分にプロであるコーディネーターがうまくかかわることによって、活動が円滑になったり、幅が広がってゆきます。それを組織として支えるのがボランティアセンターです。

そういった意味で、私は、コーディネーターは専門職だととらえていますし、ずっとそういうつもりで採用してきました。ここで言う専門職というのは、専門的知識と専門的技術の両方を兼ね備えている人という意味です。でも、ここで心にとめておかなければならないのは、それはあくまでも「こちら側」の発想だということです。専門的技術と専門的な知識があるからさまざまな取り組みをしていけるのは事実ですし、自分たちもそう思っています。でも、学生から見れば、専門的知識や技術を持っているかどうかはあまり関係ありません。福祉の現場でも、専門的技術や専門的知識を持っているのが専門職と事業者は言いたがりますが、住民から見れば、別に専門的知識や技術を持っているかどうかはあまり問題ではなく、自分の問題を解決してくれるかどうか重要なのです。つまり、学生の側にとっては、一歩先を歩んでいってくれることが安心の源なのです。先の経験から導き出し、だからこうしたほうが良いよと事柄に即した的確なアドバイスをくれる。自分が困って歩み出せないときにそっと背中を押してくれる。失敗したときには、どうフォローすればよいかを示してくれる。こうしたことを学生は求めています。視覚しようがい者のガイドでは、視覚しようがい者にとって、見える人間が自分の前を歩いていることが前提条件なんです。その後を歩いていけば自分は安全なわけです。盲人にとって一番怖いのは、自分が先頭に立たされることです。自分の前はどうなっているかわからないわけですから、そこを歩けと言われても、落とし穴があるかもしれないし、段差があるかもしれないのです。先に誰か歩いて、その後をついていけば、安心できる。これと同じです。

2番目は視野です。換言すれば気づきの問題です。これも学生たちには福祉の授業で教えていますが、身長100センチの小学1年生と140センチの中学生で何が違うのかと言えば、一番決定的な違いは、目線と説明します。100センチから見える視野と140センチから見える視野は全く違います。目の前に車がとまっていれば、100センチの小学校1年生からは、車の向こう側は見えません。しかし、140センチの中学生には見えます。視野の広さによって見えるものが違うように、色々なことに気づけるか、気づけないか、そこを広げるのはコーディネーターの役割だと思います。学生にすべてに気がつけ、全部考えろというのは無理な話ですから、何か見落としや抜けがあったときに、教えてあげられるのがコーディネーターの大きな役割です。

3番目は、それぞれの違いを取り持つことです。ボランティアを受け入れる側と活動する側の違いや色々な思いの違いがあります。この違いを当事者たちで解決しろというのは難しいです。けんかをその当事者で解決しろといっても無理な話です。第三者が入ってうまく調整することで解決できることが少なくありません。それだけ、この違いを取り持つという役割はすごく大事です。当事者同士では、たいていの場合、どちらかが我慢しなければなりません。こうした関係は長続きしません。でも、まずちゃんと違いを認めながら、双方が負担や苦痛を感じないように調整する。これこそがコーディネーターが発揮する専門性の最たるものだと思います。そして、今ボランティアセンターが担っている全学での役割の1つがまさにこれです。

私は拠点としてのボランティアセンターについて強調したいと思います。私が赴任する前は、ボランティア

センターは池袋キャンパスの4号館から学生関係施設ウィリアムズホールに行く鈴懸の径にはみ出す形で建っていました。それもプレハブのような建物で、学生たちからも何をしているのかほとんど認知できていなかったと思います。人間が色々な制度にアクセスするとき、実は存在が入口になります。学生がいきなりボランティア活動を一人で始めることはありません。場所だとか人だとか、そういったものを介在して活動につながります。相談できる人や窓口があったり、ボランティアサークルで先輩から引っ張られてとか、必ず何か存在がないとアクセスしにくいのです。そう考えると、ボランティアセンターは大事な拠点です。あそこに行けば相談できる、何かわかるだろうという受け皿なんですね。ボランティア活動へ自分で探してきて自分でつながれる人はいいです。ただ、圧倒的多数のそうではない学生たちにとってみれば、どういう形でかかわればいいのか皆目見当がつかないことがほとんどです。そのときに拠点があるかないかの違いは大きいです。

その意味で、2013年に池袋キャンパスの5号館にボランティアセンターができたのは画期的なことでした。少なくとも学生には、大学としてボランティア活動に取り組んでいること、そこに行けば知りたい情報が得られることが視覚的に実感できます。さらに、中に人がいて、ボランティアに関する何かをしているんだと伝わるこの意味はとても大きく、存在感を示すことが、ボランティアの普及にもつながるのだと思っています。

大学のボランティアセンターの役割と機能とは、突き詰めると、「若さ」をどう考えるかにつながってきます。若いというのは、可能性と可塑性があることだと言ってもいいでしょう。いろんな可能性を持っていて、それに合わせて自分をつくっていけること、それこそが若さですし、もう一つ、色々なことで失敗したとしても、それを成長の糧にできる柔軟性を持っていることも若さです。これらはすべて支援があつて成り立つことではないでしょうか。やり直しがきく、違う方法を試せる。だから、勇気を出して一歩踏み出すことができるのです。おそらくボランティアセンターは立教のなかでその役割を担ってきた場の1つだと思います。立教全体から見れば、ボランティアセンターは一部局に過ぎませんが、立教のなかにボランティアという発想をつくっている、学生が自分を見つける手助けをする。その一部を担っていることは間違いありません。

ボランティア活動への期待

これはボランティア論の講義で話したことです。フランスにロマン・ロランという作家がいました。ベートーヴェンの生涯をベースにした『魅せられたる魂』や『ジャン・クリストフ』など、20世紀を代表するフランスの文豪です。彼は若者向けに書いた本にこんな一節を残しています。

「およそ歴史や社会を動かすものは思索と行動が結びついたものでなければならない。行動しなければならぬ、とゲーテは言った。思索しなければならぬ、とレーニンも言っている。」

確かに歴史や社会を動かす者は、やみくもに行動しては駄目で、深い理念や思索が必要です。でも、それだけでも駄目で、やはり行動が結びつかないと意味がないわけです。この一節では、「行動しなければならない」と言っているのはゲーテで、「思索しなければならぬ」と言っているのがレーニンです。ゲーテもレーニンも歴史や社会を動かした人ですが、小説家のゲーテが「行動しなければならない」と言い、革命家のレーニンが「思索しなければならぬ」と言っています。ここに意味があります。ボランティア活動も同じではないでしょうか。大学で学ぶことは大事ですし、深く考えることも重要です。でも、その2つが結びつかなければ、社会を動かすことはできません。もちろん革命を起こせとは考えていませんが、日々の行いの中で、あるいは、日々の実践の中でできるほんのわずかなことを淡々と実行してゆく。先程お話ししましたが、同じ料理でも、少しの工夫で全然違ってきますし、そこで家族が、家でこんな味ができるんだと驚く。このささやかな喜び、幸せが、世の中を少しずつよくする鍵になってくると思います。

今、「三密」を避けるために何がつらいのかと言ったら、こんな小さな喜びや、ちょっとしたことができなくなっていることではないでしょうか。近づかないように、触れ合わないようにということで、今まで当たり前だったことができなくなっている。当たり前と一緒に食べたり、話したり、あえて考えもせずに過ごしていた日常が、実はとても幸せなことだったんだと痛感しています。ボランティアの世界は、そんなに大きく世の中を変えることをめざしている訳ではありません。施設に行き、1日中おむつをたたんでいました、半日、空き缶を拾っていましたとかいうこともよくあります。この行為を取り出して見たら、社会を変えられるわけでもないし、自分の未来が切り拓けるわけでもないかもしれませんが、一歩踏み出したこと自体が大きな意味を持っていますし、何かをするときに試行錯誤と工夫を重ねることが成長につながっていくのだと思います。

立教大学のボランティアセンターは、立教ならではのカラーを持っていることが最大の強みですし、ボランティアであることを発信している拠点としての自負を持っています。私は歴代のセンター長としては長く勤めさせてもらいましたが、立教大学の歴史から見れば、150年の歴史の中のたったの8年です。ボランティアセンターの仕事は、この150年の蓄積に支えられています。そう考えれば、これから先の未来につなげていくため

にも、とまることなく歩み続けていただくことを願っています。立教で学んだ人たちが、来てよかった、この4年間、あるいは大学院を含めて6年間で自分なりのものを見つけられたという手応えをつかんで巣立ってほしいと願っています。それは大学が自らの意義を確認できることでもあります。

駆け足となりましたが、8年間で振り返って気づいたこととお話いたしました。ご清聴ありがとうございました。



○佐藤：平野先生、ありがとうございました。本当に平野先生らしいお話だったと思います。日頃私たちは、先生がおっしゃるように、「ボランティア」とは何なんだろうかということを考え、問い続けながら仕事をしています。しかしともすると、それが凝縮されて、狭くなったり硬くなったりしてしまうことがありますが、今日、平野先生がもう一度「ボランティア」という意味合いを、立教大学とのつながりも含めて解きほぐして説明していただきました。そして、その中に詰まっているものが何なのか、立教大学のボランティアセンターとは、ボランティアコーディネーターとは何なのかという意味合いやそこに学ぶ学生がどういう存在なのかということにも触れながらお話していただいたことは、私たちにとって、とても大きな学びのひとつであったと感じています。

実は、今年度ボランティアセンターのメンバー全員が一堂に会したというのは、今日が初めてです。月1回オンラインのボランティアセンター会議はありましたが、平野先生と対面で大事な話を共有できたということは、本当に良かったと思っております。

残りの時間、参加した一人ひとりのメンバーと平野先生とで質疑応答の時間をとれればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○中川：平野先生、ありがとうございました。モヤモヤしていることがすっきりしたと思います。色々思うのですけれども、一番私が、もう一回しっかりと自分の中で改めて考えたいと思ったのは、ボランティアセンターと言っても、色々あると思うことです。地域社会の中にもあるし、その中で、大学のボランティアセンターの位置づけとか、大学のボランティアセンターが持っている意味というものを改めて自分の中で考えたいと思います。あと、立教大学は学生部のパンフレットに書いてあったりするのですが、「自分探し」ではなくて「自分づくり」だのように表現してあって、4年間という1つの年限を、自分を探すのではなくて、つまりどこかに正解があるものを探すのではなくて、今ここで自分を耕してつくっていくということが、1つの大学の使命として、特に立教大学が大切にしているものとされています。自分をつくっていくということにも、他者と関わりながらボランティアをしていくということと非常に関係しているということを改めて思いました。

あと大学のボランティアコーディネーターの仕事は、社会と個々人の接点をつかんだり、人と人とのつながりをつくったりする意味において、非常にチャプレンの仕事と似ているなと思いました。最初に平野先生がお話くださったように、もともと関東大震災の後、ボランティア活動というのが立教大学の中で始まっていきまされたけれど、多分それを主導していたのは、おそらくチャプレンが持っていた、当時のネットワークというか、人とのつながりの中に学生を、「あなたが行って来なさい」と言って、そこにどどんつないでいったというのが最初の始まりだったのではないかなというように思います。ボランティアコーディネーターのお仕事というのは、何かここに本当に育てたい、関わりたいと思う学生が1人いて、その学生をどのように育てていくか、つくっていくかということに、ボランティアセンターが持っているリソースをつなげていく、そういう中で、それこそボラン

ティアのボランティアな人材育成、そういうものに寄与しているところがボランティアセンターであり、ボランティアコーディネーターなのだなということを改めて思いました。

もう1つ思ったのが、戦後、大学教育で、多くの大学が大事にしていた「一般教養」とか「学生助育」というものがありますが、現在、ほとんどの大学がそういうものをやめて、専門科目などに特化していく中で、その立教大学で言うところの「全学共通科目」と「学生助育」というのは、立教大学の中でも死語になっているのかもしれないのですが、そういう「学生助育」というのは多分、単に支援するだけではなくて、自らが育とうとする力を組織的に支援していくというのが、立教大学が大事にしてきた「学生助育」ということであり、本当に立教のスピリットではないかと思えます。色々な人がどんどん忘却していく中で、そういうマインドというかスピリットというのは、このボランティアセンターとか立教サービスマニファスティングセンターとか、そういうところにずっと継承されているのだなということを改めて思いました。とてもいい勉強の機会になりました。ありがとうございました。

○平野: 本当にお話のとおりです。やはり、本当は立教大学が持っている「全学共通科目」とか、「学生助育」は、もっと重視するべきだと思います。

○松村: 非常に貴重な話を聞かせていただいて、ありがとうございました。平野先生はよく「ボランティア論」でもおっしゃっていましたが、ボランティアというのが、他人のためであるというイメージは世の中というか、学生一般も持っているイメージであります。しかし、やはりお話を聞いて改めて、自分のためという部分もあるというか、「自分づくり」という部分が大きいのだなと思えました。そしてその達成は、自分をつくっていく過程において、サポートが必要だというようなお話がありましたが、その部分に関わることができる、ある種の幸せというか面白さ、大学職員として経理とか財務とか人事等の部署に配属になると、1ミリもそんなことを思わない仕事をする機会が多いのですけれども、ボランティアセンターの仕事に関わっていくと、そういう4年間で非常に成長していく学生を見ることができる、そういったポジションにいることができるということの幸せというか、ありがたさというのを改めて感じました。

大学職員の立場からすると、今のような視点が仕事の中にあるということが薄れつつあるというのは事実で、大学が担わなければいけない仕事がかつて高度・細分化しつつある中、先ほど申し上げた経理にしろ、人事にしろ、財務にしろ、そういった部署がよりある種の専門性が必要になっている以上、その反動でだんだん従来の立教が大切にしてきたことがおろそかになっていくことは非常に残念だなと思えました。

平野先生に伺ってみたいのは、大学を取り巻く環境が、もちろん阪神・淡路大震災の時代とは全然違いますし、それどころか、やはりこの10年という短い間をとってしても変わってきていると思います。そしてそれと併せて入学してくる学生の性質が変わってきている部分があるかと思えます。このような状況でこのボランティアセンターの将来というか、今後のボランティアセンターにおいて今まで大切にしてきた部分にプラスアルファする部分があるとすれば何かという点でご意見があればいかがでしょうか。

○平野: 学生が変わってきたのは事実ですね。昔の学生より、ある意味では、精神年齢的にはちょっと幼くなってきているようです。知的能力は向上しているけれど、子どもっぽくなっています。立教のカラーもあって、自分から何か行動するとか、自分から要求するのが難しくなっていますし、先ほど中川チャプレンがおっしゃったように、できている答えを求めたがるとか、そういう傾向になってきていると思います。福祉では、「個別化」と言いますが、昔の学生は群れて何かするという傾向でしたが、最近はコンピュータゲームを1人でパラパラやるように、孤立化する傾向が強まっているようです。

それから大学自体変わって来たということがあります。とはいえ、確かに学生は変わっていますが、青年期の特徴はそんなに変わらないと思っています。世の中や時代によって学生のカラーは変わりますが、本来、青年期に何を求めるかということは、案外、共通しているものがあると思います。やはりそこを大事にしてあげることが必要だと思っています。

今の世の中全体を考えれば、効率的で効果的であることを求められます。たくさんお金を稼いで、偉くなることがよいという価値観、これは世の中の一般の価値観では、ごく普通のものです。ただ、福祉の立場からすると、その一般の価値観で、しょうがい者とか高齢者を見てしまうと福祉も社会もなくなってしまいます。立教大学の持っている1つのポリシーとして、神の前ではどんな人であっても全て平等であるということがあります。だから、世の中一般の価値観とは違う思いがある。キリスト教精神に基づく教育を行う立教大学だからこれが言えるのだと思います。これはやはり立教大学のカラーとして持っていていいと思います。ボランティアに携わる者として、私たちはアンチテーゼとして出してもいいと個人的には思っています。

○阪下:平野先生、お話ありがとうございました。私も6年ほど会社員を経験して、それから転職してきて立教大学で職員になり、もう15年強くらいになるのですけれども、純粋な学生支援部局というのは今回が初めてで、日々業務を行うにあたって色々な気づきをさせていただいております。本当にありがとうございます。今日も特にお話をいただいた中で立教大学の特徴として、ボランティアセンターは「寄り添い型支援」をしていくという話がありました。学生自身が考え、行動できるように支援するというので、これは本当にやる意義があることだと思っています。私は特に会社にいたので、教育というのはサービスであると、何かしてあげることが大事であると考えていた節がありましたが、やはり先輩職員の方から、「ちょっとそれはやりすぎじゃない」ということを結構言われたりして、そういったことがどうしたことなのか、なかなかわかっていなかったのですけれども、今日お話をいただいて、なるほどと思いました。学生自身が考えて行動でき、そして成長していく、そういう過程を含めて教育なんだということがとても大切なことなんだと、また気づかせていただきました。本当にありがとうございました。

平野先生に聞きたいなと思っていたのは、8年間やってこられた中で、一番ご記憶に残っているご経験はどんなことなのかということです。

○平野:色々ありました。2013年に赴任したときのボランティアセンターは、組織というよりも職人集団でした。それぞれが自分の仕事を持っている職人で、ボランティアコーディネーターもそれぞれ自分のテリトリーを持っており、何か組織で1つ仕事をしているというのではなく、それぞれが自分のテリトリーを持っている職人が集まっているという感じで、ボランティアセンターって何だろう。そのような第一印象でした。

そのような意味でこの8年間で、ボランティアセンターがセンターらしくなってきました。みんなで1つの目標に向かって仕事を分担しながらやっていくスタイルや風土ができてきたことを実感しています。今、佐藤課長を中心にして、組織として、色々な運営ができるようになったことが非常に大きいことでした。

○小幡:平野先生、ありがとうございました。色々お話をいただいた中で、ボランティアセンターの支援の特徴が印象に残りました。「寄り添い型支援」や「協働型支援」、「提案的支援」ということですが、今年はコロナ禍でこれらの支援をより学生から求められたように感じました。本当に大事な支援だということを実感できた年でした。コロナ禍で、活動が一切できないサークルも多く、「もうサークルをたたんでしまおうか」という相談を幾つか受けました。そのような時に、ボランティアコーディネーターを中心に他サークルとのコラボの提案や、学生と学生とがつながれるような対応をしました。ボランティアセンターを頼ってくれたのも、学生たちがすぐにつながれたのも、昔から「寄り添い型支援」や「協働型支援」をしており、すでに土台ができていたからなのだと思います。

「提案的支援」に関しても、学生一人ひとりの悩みに耳を傾けながら、今の学生たちに必要な支援というものを皆で話し合いながら考えていきました。色々な提案をしていく中で、私は立教大学のボランティアセンターしか知らないの、これが普通だと思っていたのですが、大学によって特色も対応も違うのだなとお話を聞いて知りました。このように皆で話し合いながら学生一人ひとりに提案ができるのも、昔から立教大学が「提案的支援」をしてきたからこそなのだと思います。改めてお話を聞くことができ本当に良かったと思います。この立教大学の特色を生かしながら今後も仕事をしていきたいと強く感じました。ありがとうございました。

○広瀬:本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。立教大学の多くの歴史の中で今があるということを改めて詳しく伺うことができ、本当にこちらで働くことができ良かったと感じました。特に印象に残ったのは、「ボランティアコーディネーターというものは、プロでありながらアマチュアに携わっている専門職である。」というお話で、素敵な仕事だと思いました。4月に着任して、出勤して3日で在宅勤務になったこともあり、どう動いたらいいのか、立教大学の標準がどういったものなのかということも簡単に聞くことができない環境で業務を行っていました。アイデアを出し合わなければならない時にも、立教大学に相應しいのか？と判断することが難しく、自身のあり方や関わり方を模索していました。みなさんが当たり前のように進められている業務の内容を理解するために、1日中、過去の様々な資料を調べる毎日でした。

慣れないことばかりですが、ボランティアセンターで活躍できるように頑張ろうと改めて決意しました。ありがとうございます。

○茅:本日はありがとうございました。ボランティアコーディネーターの話が始まり、「専門職としてのボランティアコーディネーター」というお話になって、正直どうしようと、大変焦ってしまいました。私自身もいまだに「ボランティアコーディネーターって何だろう」と常に考えながら仕事をしています。

それは、平野先生が料理研究家の話を、例えで出されていたのですけれども、この仕事を私が始めたときに、何をしたいかわからない、つまりレシピがなかったと思います。レシピがなくて、いきなり、「それでは学生支援をやってください」というように言われて、正直非常に戸惑いました。

前職は教員でしたが、仕事として学生や児童と関わるというスタイルは同じです。しかし、小学校ですと、指導要領というものがあって、自分で授業を事前に組み立てる準備をして子どもたちに関わって…というスタイルでした。

大学のボランティアセンターでの仕事というのは、会う学生会う学生が「初めまして」から始まって、そこから全くのゼロベースで学生と関わり、そこから一緒にやり方を見つけていかなければなりません。本当に100人学生がいたら100通りのやり方があり、それが不安で、前任者の関口さんの背中を見ながら、こういう風に柔軟に対応を変えていかなければいけないのだと、学びました。

だんだん慣れてきたときに、コロナになり状況が一変し、学生を現場につなぐということができなくなりました。そこでまた、ボランティアコーディネーターは、この状況下で何をすべきなのだろうかと、私の中でもすごく迷いや葛藤がありました。

つなげることができないのだったら、私たちのいる意味がない。しかし、「学生支援」というのは絶対にこの状況でも必要であるはずと思い返して、ボランティアセンターの4人、それに、サービスラーニングセンターの教育研究コーディネーターの福原さんや大森さんとも何度も何度もオンライン会議をしながら、ようやく「学生支援」の形を見つけていったという感じでした。

正解がないし、これからもレシピもマニュアルもないものであるというように思います。今回お話を聞いて改めてそれをしみじみ感じて、今年とまた来年とも状況は違うし、「清里環境ボランティアキャンプ」や「高島の農業体験」、ほかの行事もできるかどうかかわからないという中で、私たちが柔軟に関わり方を変えていくしかない。ウィズ・コロナの時代に、こうした柔軟さも非常に大事になってくるのではないかと思いました。素晴らしいお話を本当にありがとうございました。

○増田：9月下旬から立教大学ボランティアセンターで働くようになって、学生としっかりと触れ合うということがなく、オンライン中心の活動になっていたのですが、今回、平野先生のお話を聞かせていただいて、立教大学ボランティアセンターには、どのような歴史があるのかということを知ることができて理解しました。何となくわかってはいたつもりではいたのですが、お話を聞くことで、立教大学ボランティアセンターが、特に学生に対しての役割を大きく果たしているという理解ができました。今は主にオンラインでの関わりですが実際にコロナが落ち着いて、対面でいつもの日常に戻ってきたら、その活動もぜひ見てみたいというように改めて思いました。

○佐藤：今日は本当にありがとうございました。先生のお話をお聴きして、2つの大事な点を認識しました。1つは、私もずいぶん歳を取ってきたので、色々な人に、「立教らしさが残る、最後というか、大事なところで働くことができいいよね」と最近よく言われます。その意味合いは何なのかということ自分なりに考えていたのですが、平野先生のお話の中で、立教大学ボランティアセンターの中に、チャペルが創立以来ずっとつないできた建学の理念、それから、学生部がずっと大切にしてきた大事な考え方(学生助育)、そしてボランティアセンターが学生やボランティア先などの関係者とともに培ってきたもの、そういった思いがボランティアセンターにはたくさん込められているところ、まさに他の人から見ても、立教らしい、本当に良い場所だねというように思われているところなのかなと感じました。そのような視点からも今一度、立教大学ボランティアセンターの持つ意味や大切さを認識させていただきました。

それからもう一つ、皆さんとのやりとりの中で本当に大事なと思ったものは、中川チャプレンもおっしゃっていましたが、今、大学の中で「学生助育」であるとか「SPS」という言葉は、もう死語だと言われ、振り向かれなくなってしまっています。しかし、それは全くナンセンスなこと、いくら時間は経過しても、大事な理念や考え方はずっと生き続けるものであるし、継承していかなければならないと思っています。

まさにその「学生助育」というのは、学生を助けて育てるのではなくて、学生が育つのを支援するという意味なのです。だから、平野先生や中川チャプレンがおっしゃった、学生が自分をつくっていく、まさにその支援をしていくということだと思うのですが、そのことが今、本当に大学教育の中で問いつまれないといけないと思っています。せめて立教大学ボランティアセンターはそういったことを決して忘れずにこだわりながら、学生に伝え続けていくことが大事だと再確認しました。

それがやはり立教らしさというものを我々がこだわり続けていくことにつながるのかなということを、平野先生のお話を聞きながら考えておりました。

本当にありがとうございました。

一座談会ー 新しいボランティアの形を考える

実施日：2020年12月14日(月)

会場：立教大学新座キャンパス7号館2階会議室

参加者：平野 方紹(立教大学ボランティアセンター長・立教大学コミュニティ福祉学部教授)

中川 英樹(副センター長・立教大学チャプレン)

藤橋 唯(立教大学法学部政治学科1年次)

平岡 立成(立教大学観光学部観光学科3年次)

小沼 和矢(卒業生、埼玉県三芳町社会福祉協議会職員)

進行役：茅 芙美(立教大学ボランティアセンターコーディネーター)



■コロナ禍の1年を振り返って

茅：「激動の…」と言ってよい1年になりました。人と関わるのが最たる活動であるボランティアにとっては改めて存在の意義を考える年でもありました。今日はウィズ・コロナ、そしてポスト・コロナ時代のボランティアセンターのあり方をみなさんとともに考えていきたいと思っています。まずは、今年の取り組みなどに触れていただきながら、自己紹介をお願いします。

藤橋：法学部政治学科1年の藤橋唯です。出身は群馬県で、9月に体育会のボート部に入りました。今は埼玉県戸田市で寮生活をしながら部活動に励んでいます。なぜこのコロナ禍でボート部というハードな部活に入ったのかというと、きっかけは、SNSで日々練習に全力で打ち込む先輩たちの姿を見て憧れたことでした。強豪で、本気で日本一を目指している熱さがありながら、アットホームで温かい雰囲気があるところにも魅かれました。入部して今3カ月になりますが入ってよかったと心から思います。

将来の夢は、地域コミュニティの再生を通じて誰もが安心できるような社会をつくることです。今はボランティアセンター主催の「ボラカフェ」にアプローチしたり、先輩から話を聞いたり、ほかには近所の子ども食堂に、



茅 芙美コーディネーター



藤橋 唯さん

まだアポを取っている段階ですが、動き出しています。あとはとにかく情報を集めて、今できることを始めています。この夢は簡単ではないと思いますが、今日出会った皆さんや、これから出会う方々と協力して実現していきたいです。

平岡: 観光学部観光学科3年の平岡立成です。観光とマーケティングの中でも、特に地域振興に観光をどう役立てればいいのかとか、地域ブランドの作り方といったことをゼミや授業で勉強しています。まちおこしや地域創生に非常に興味があって、そこは今、参加しているサークルの被災地での復興支援活動とも結びついているところがあると思っています。

そのサークルですが、僕は東日本大震災復興支援サークル「Three-S」の代表を務めています。具体的な活動としては、夏休みや春休み、冬休みなどの長期間の休みを利用して東北の三陸沿岸の地域に赴き、そこに生活している方々とお話をしたり、クリスマス会を開いたりしています。逆にその体験や成果を持ち帰って、学園祭で写真展を実施したり、東北の名物のずんだ餅を販売したりして、震災の記憶を風化させない取り組みもしています。防災意識を高めることも1つの目標です。今年度はコロナ禍なので現地にはまだ行くことができておらず、オンラインで現地の方と話をするのが精一杯の状況です。



平岡 立成さん

小沼: 立教大学コミュニティ福祉学部の平野ゼミ OB の小沼和矢と申します。今は地元の三芳町社会福祉協議会の職員をしています。メインの担当がボランティアセンターということで、立教大学のボランティアセンターにはよくお邪魔しているんですが、ほかにも福祉教育、車椅子大会だとか、母子・父子世帯の子どもの支援全般だとか、地域住民向けの講座の開設や、しょうがい分野にも関わっています。最初はボランティアセンター専任で入る予定だったんですけど、気づいたら多方面を手がけていました。

今、特に力を入れている仕事が1つあります。コロナ禍において、ほかの社協や地域でのイベントがどんどん中止になっていく中、うちの社協では、基本的に中止はしないようにするのがモットーです。代替案としてオンラインだとか、人の接触を少なくして実施する方法を考えて行っています。私は学習支援教室を担当していますが、Zoom や LINE を使って子どもたちと勉強したり、福祉教育や車椅子体験は、本来だったら先生が行ってお話をするんですが、映像データをお渡しして観てもらおうようにしたり。今の環境でできることを考えて取り組んでいます。

もう1つ力を入れているのが、高齢者へのオンラインサポートです。高齢者にとってスマホとかタブレット、パソコンを使いこなすのは難しいことですが、社協でかかわっているボランティアさんがタブレット教室を始めたので、うちもタブレットを7台そろえました。地域でオンラインを活用できる高齢者の方を少しずつでも増やしたいと思っています。



小沼 和矢さん

平野: ボランティアセンター長の平野です。

今年は想定外の年で、退職間際になってこんなにコンピューターを覚えなきゃいけないのかと困りました。ほとんどがオンライン授業になってしまって、画面を相手にしゃべるのは疲れますね。学生は大変だろうと思います。ゼミ合宿も一切できないまま最後を迎えることになり、非常に寂しい年になってしまいました。

所属するコミュニティ福祉学部福祉学科では、社会福祉実習があります。福祉現場で実習するのですが、予定していた受入先が軒並み受け入れ不可になってしまいました。本来は 180 時間の実習ですが、どうしても 90 時間しかできないなど、この4月、5月は手配に追われました。実習はあきらめた大学もありましたが、立教では、とにかく現場に行っていきたいと、何とか実施しました。とにかく大変な状況に追い込まれて、みんなで協力してここまで来た年でした。

中川:2016年からボランティアセンターの副センター長をしております。立教大学には2014年4月からチャプレンとして奉職しています。チャプレンの仕事は、簡単に言うと、「人と人をつなぐ」ことです。僕たちは「人間」という字のように「間」を持って生きているんだと思うんですね。皆さんもそうですね。親と自分の「間」、友だちと自分の「間」というように、「間」をいつも抱えながら生きている。そこには、喜びもあるし、絶望したり、傷ついたり傷つけられたりもあります。そんなふうにいるいろいろな「間」の中を行ったり来たりしながら、人と人をつないでいくのが僕たちの仕事だと思って働いています。

私はもともとキリスト教の牧師なのですが、大学のチャプレンとして働くことになるとは考えてもいませんでした。立教という場所で学生一人ひとりと関わりながら、その学生たちが社会とどのような接点をつくっていくのかを考えています。自分の課題、課題の場所を持つというのはすごく大事なことだと思っているんですね。平岡さんが震災の後の東北と関わり続けているように、自分が物事を考えたり、発想したり、戻っていくことができる場所を人生の中で持つ必要があると思っています。社会の中に自分の課題を持ち続けられる場所を、どうやって学生さんたちの中につくっていくか。また、チャプレンとして、学生一人ひとりと関わりながら、適切な場所につなげていくことを大事にして働いています。

■大学で「ボランティアをする」ということ

茅:今年がこんな1年になるとは、誰も予想していなかったと思います。新型コロナウイルスの感染拡大で、立教大学も4月からオンライン授業になりました。生活全般にわたって制限がかかり、大学に通うことができないということで、不自由で不安な日々を送っている学生も多いはずですよ。

どうしてもネガティブなことがまず思い浮かんでしまうかもしれませんが、それだけではなくて、こんな気づきがあったとか、発見をしたとか、そういう体験を共有する場にしていきたいと思います。ボランティアというのは、やはり自分に余裕がないとなかなか踏み出せないと思いますが、学生のお2人が、ボランティアに関わろうと思ったきっかけは何だったのでしょうか。

藤橋:私は何度か転校をしたのですが、新しいコミュニティに一人で入って居場所を見つけることの難しさや、困難にもたくさん直面しました。ふと視野を広げてみたときに、地域には独り暮らしのお年寄りとか、共働き世帯の子どもとか、寂しい思いをしていたり、居場所が感じられないような人たちがさまざまいることに気づいたんですね。自分と同じような思いをする人を1人でも減らしたいと思い、そこから、自然と自分でアクションを起こしてボランティアをしてみようと思えるに至りました。不安よりも何かができる期待のほうが大きかったのですが、本格的にボランティアをしたことがなかったので、どのようにして情報を集めていいかわからなかったんですね。そこでボランティアセンター主催の「ボラカフェ」で職員の方や先輩方に色々つながりをいただいて、入っていくことができました。

平岡:私はあまり躊躇はなくて、嫌だったらやめればいいくらいの軽めの気持ちで最初の一步を踏み出したんです。周りの人たちがとてもいい人だったり、一緒に話したり何かするのが楽しかったり、居心地のよさで今もとどまっています。何か特別なきっかけは正直思い当たらないですね。

中川:藤橋さんは、地域コミュニティの再生を目指したいとのことですが、どんな社会をイメージしていますか。

藤橋:私自身はインプットの段階で、まだフィールドでの学びができていないので、言い切れるものはないんですけども、イメージとしては、地域の中で孤立している人がいたときには気づき合える社会でしょうか。今は近所付き合いが希薄化していて、住民同士のつながり自体なくなりつつあるように思います。そういう状況の中で見逃されている人の存在をなくすこと。昔は近所の人、地域の人同士が気づき合って、支え合っていた部分が崩れてしまった中で、自分で選んで参加していくコミュニティのみならず、そこに住んでいることで支えてくれる人がいる。将来的には行政からアプローチしていきことができれば今は考えているところです。

中川:特に都市部なんかは家が階層化して、もともと「横」だった人とのつながりが「縦」になってしまった。それによって支え合いの文化が崩壊したと言われるんだけど、小沼さんのいる三芳町はどうでしょうか。まだそういう支え合いの文化は残っていますか。

小沼:三芳町ぐらいの規模の町だと、「あの人最近見ない」とか、「洗濯物が昨日から干しっ放しだよ」とか

いう連絡はしょっちゅう入ってきます。地域住民の全然知らない人から「何区の何とかさんがずっといないみたいだから見てきてほしい」と頼まれて見に行くことも月に何回かあります。独り暮らしの高齢者宅をどれぐらい把握できているかわかりませんが、地域ごとに「福祉新聞」というのをつくって配っているんですね。それ以外にも、独り暮らしの高齢者が社会から隔離されないような取り組みがいろいろされています。

練馬区の社会福祉協議会に実習で行ったときに、人口の多い都市部でつながりを持ち続けることの難しさを感じました。極端なことを言うと、隣に住んでいる人の顔もわからない人が多いですよ。そういう中で仕事をしていてすごく感じるのは、個人のよりよい生活と地域づくりを考えたときに、結構ぶつかるものがあるんです。人と接したくない人っているじゃないですか。三芳町でも、自治会から若い世代が抜けていつちゃうんです。だから今、どちらを優先すればいいのかという壁に当たっています。わかりやすいのは「ひきこもり」です。とりわけ「8050問題」と言われる問題ですね。80歳を超える高齢者の親と一緒に暮らして引きこもっている50代ぐらいの人たちって、人と関わりたくないけれども、このままでは親が亡くなったときに孤立するという危機感を持っているんですね。こういう人を支援するときに悩むんです。三芳町のように人口規模の小さな町でも、人とのつながりって何が正解なんだろうと思っているところなので、規模が大きくなればなるだけ、問題も複雑になっていくのだろうと感じています。

平野:小沼さんはいわゆる普通の大学生生活、当たり前キャンパスに通って、サークル活動もして卒業した。一方で平岡さんは、2年間は普通の大学生生活を送って、今年1年こういう生活になってしまった。藤橋さんは、一般的な大学生生活がないまま入学後1年を終えようとしています。同じ大学の学生・卒業生でありながら、3人はそれぞれ違う状況にいるわけです。それぞれの立教での「学び」、「得たもの」、「期待するもの」とはどんなものでしょうか。



小沼:私は高校生のときから福祉の専門職に就きたいと思っていました。立教に入って、最初は、将来は福祉事務所で働こうと思っていたのですが、実習先で割り振りをされたのが社会福祉協議会で、あまりよくわからないけど行って見ました。それがきっかけでボランティア活動に携わるようになり、結果として社会福祉協議会で仕事をする事になりました。立教大学に入り、平野先生のゼミに入らなかったら今の自分はなかったと思っています。学びが人生に直結する充実を感じています。

サークルやゼミでは代表を務めましたが、100人で合宿旅行に行く手はずを整えたり、まとめたりして、リーダーシップを実践で学べたのも今に生きています。例えば県内の市町村社協職員が集まる研修が毎年あるんですけど、グループに分かれて代表、発表者を決めてくださいとふられたときに、ずっと手が挙げられるんです。それも立教大学でいろいろなこと関わっていたおかげだと思っています。

藤橋:大学が始まったときは、オンラインも十分使いこなせず、家に一日中いる生活とどう向き合っているかわからない手探りの状態でした。でも、インプット中心になるかと思っていたら、全くそんなことはなくて、こんなにいろいろなことがオンラインでできるのかという驚きをまず感じた年になりました。家にいて時間が十分にある分、Zoomを通じてボランティアセンター主催の「ボラカフェ」に出席し、国際交流のイベントや語学系とかビジネス系のセミナーに参加してみたり、遠くに住んでいるおじいちゃん、おばあちゃんと話をしたり。自由になる時間が増えた分、むしろ色々なことができました。

オンライン活動で一番大きかったのが、「グローバル・リーダーシップ・プログラム」です。コロナ禍は人とのつながりを絶ちました。でも、そのことでかえってつながりの大切さを感じた人が多かったと思うんです。プログラムを通じて、今までそれがどれだけ不十分だったか、居場所を求めている人がこんなに多かったんだということに気づくことができた半年でもありました。グローバル・リーダーシップ活動というのは、クライアント企業からの課題と学生の理想と提案をうまくマッチさせて施策をつくっていく活動です。その中で出てきた理想が、安心できる場所でした。私は立教大学に入学して、不安感を抱えている人が多いことを知り、誰もが安心感を得て支え合うことのできる第二のふるさとづくりを提案していました。

大学生に期待していたことは、キャンパスでしかつくれないつながりでした。1つは、気の合う仲間はもちろんですが、一方で、ゼミやプログラム活動、部活動で刺激し合い、高め合える仲間をつくりたい、そういう学生同士のつながりを求めています。

もう1つは社会とのつながりです。豊島区には、日本のボランティアの中心的存在の団体や NPO がたくさんありますよね。私は高校生のときから地域コミュニティに強い関心を持っていたので、そういうところに実際に出て行って学んでいきたい、そういうところとつながっていきたくて思っていました。

平岡:我々の活動も、現地に行かなければ始まらないところがあります。特に被災地のような場所で、つながれる場所の持つ意味は非常に大きいと思いました。部員たちの間でもつながりを求める気持ちはどんどん強くなってきている状況なので、安心できる場所が欲しいという点はとても共感できます。

茅:例えば SNS はどんな使い方をしていますか。他愛もないことをちょっと LINE で友達に伝えてみようとか、そんなことはありますか。

平岡:僕はないですね。気軽な話をするためだけに SNS で連絡をとるのがあまり好きではないんです。返信しなきゃという気持ちになるということが、面倒くさいとも思っちゃうんですよ。さっきのつながりの話にも関わってくると思うんですけども、そこも多分、個人個人で温度差があるのではないのでしょうか。積極的に SNS でつながりたいと思う人もいれば、連絡が来なければ特に何もしないスタンスの人も当然いると思います。ただ、対面で出会うと、嫌が応でも話さなければいけないとか、席が隣だったら何か話そうとか、そういうきっかけにはなるので、そういう場が失われるのは残念ですね。

藤橋:慣れないせいもあるかもしれませんが、オンラインだと薄さを感じてしまうんです。SNS を通じてできたつながりもあります。1つは、みんな1年生で友達がいらない状態なので、Instagramにつけるハッシュタグでつながって、オンライン上のコミュニティをつくって見たんですが、どんな人が全くわからないと不安感があるんです。ずっと SNS と Zoom でやり取りしていますが、本音で会話しづらいとか、雑談の難しさも感じます。授業ではあまりないですが、グローバル・リーダーシップの活動で、ご飯を食べながら会議しようとなったときに、対面だとごく自然にできて、誰がしゃべり始めていいかとかいうところにもすごく気を遣います。雑談って自然にしているように見えて、信頼関係の構築に関わっていたんだなと感じます。課題解決の議論の質、チームワークの質、成果物の質も、コミュニケーションで築き上げた信頼関係でできているものだとわかって、今それがしにくいというのは弊害ですね。

平野:秋学期に1年生を担当しました。基本はオンライン授業で、2回ほど大学で対面で授業をしました。そのとき1年生が「オンライン講義はやっぱバーチャルだ。画面でつながってはいるけれども、要するにゲームの世界と同じで架空のように感じる。初めて実際に顔を合わせてみたら、やっぱリアルのほうが、反応がわかるし、顔が見えて、ちゃんと生身の人間なんだって実感できるからいい」と言っていました。なるほどと思いました。

そうは言っても、今の状況はまだ続くかもしれません。どのようにして実感できるような関係をつくっていくかがポスト・コロナに向けての鍵になると思います。

茅:実感ができる関係性や雑談力の大切さは、私たちも仕事をしていて感じるところがあります。例えば、同じ「聞く」でも、Zoom 会議で話を聞くのと、雑談しているのを横から耳を傾けるのとでは全然違います。人と人との関係づくりにおいて、他愛もない話というのは、エッセンスというか、ちょっとした「香辛料」みたいな感じで、深みを与えてくれるのではないのでしょうか。他人に関心を持つきっかけになりますよね。もっと知りたいなと思わせるものがあります。

平野: 林業体験で行く陸前高田でもそうです。おじいちゃん、おばあちゃんと話していると、脱線話がほとんどです。でも、それが重要です。要件だけのやり取りだったら、関係を築いていけません。他愛のない話は、一見無駄なようでいて、実はつながりを生む源泉と言えます。

小沼: 社協でも同じです。三芳町では傾聴活動というのをしています。独り暮らしの高齢者の家をボランティアさんが月に1回以上訪問して、話をします。ところが、それも2月からできなくなってしまいました。心配で、私は時々利用者さんに電話をかけて生活の状況などを聞くんですが、そうするともうとまらなくなっちゃって、30分とか平気で話し続けるんですよ。仕事があるからそろそろ切りたいなと思うときもあるんですけど、やはり聞いてあげるということがすごく大事ななというか。雑談、他愛もない話がないと逆に駄目なんだというのは改めて強く感じているところです。

■「ボランティアの形」はどう変わるのか

茅: 3人のお話に通じているのが、「人のつながり」とか「地域」ということですが、コロナ禍を経て、これから人々の意識が変わってくると思います。小沼さんは現場、最前線にいて、これからどういう仕掛けづくりをしていったらいいかなど、今お考えになっていることはありますか。

小沼: コロナ禍は、悪いことばかりでもなくて、こんな方法もあるんだとか、従来の発想では出てこないものを見つけることもできました。そういうところを伸ばしていきたいですね。例えば、高齢者向けのスマホ、タブレット講習。このままだとまずいと思ってみずから行動を起こす高齢者の方はいいいのですが、危機感を覚えているも何もしない、できない高齢の方も結構いるんです。YouTube や Zoom って、ガラケーではできないですよ。だからこのタイミングでガラケーからスマホに変えたというボランティアさんたちもいっぱいいます。そのようにみずから進歩していくというか、対応していくんですけど、別にいいやと思っている人たちにどう仕掛けていったらいいかなというのが目下の最大の課題で、会議で毎週のように話題になるのですが、具体的な解決策が見えていないのが現状です。

人間って、本当に何かまずいと思ったときは、動くと思うんですね。ひきこもっていた人でも、何かあればちょっと出てみようという気持ちになるでしょう。そのタイミングでうまく支援が入るというようにつなげていくことが大事だと思っています。ずっと学校に行っていなかった子をたまたま外で見かけたので、話をしたら、子ども食堂に来てくれるようになったんです。何回行っても会えないおうちでしたが、辛抱強くずっと関わり続けるというのもいいのかなと思ってます。

茅: 「続ける」ということでは、平岡さんはこの1年、大変でしたね。被災地に行けない今の状態から、一步を踏み出しつつあるところで、今、復興支援についてどのように考えていますか。

平岡: 現地に移住された方や高齢者の方など、色々な人に「3・11」を聞いてみるというプロジェクトを考えています。今後、震災を忘れていく人も増えていき、下の世代に至っては、震災より後に生まれた子たちがどんどん増えてくる中で、多分みんな、いつまで続けられればいいのかと内心では感じてはいて、結局、行き着く先は、「復興って何だろう」というところだと僕は思っています。それは人によって感じ方も違うだろうし、何をもって復興とするのかという話でもある。もっと言えば、「支援って何だろう」という話にもつながっていくと思っています。結局、がれきの撤去とか、肉体的な支援はもうほぼ行っていない状況で、今はひたすら話を聞いたり、子どもたちと遊んだり、町のお祭りに参加したりといった活動をしているんですが、それは本当に「支援」なのか、ひょっとして自己満足じゃないのかという議論も出てきていて、10年の節目に、この先どうするか悩んでいます。そもそも「支援」という言葉自体にも疑問を感じてしまうんです。結局、する側とされる側というように対等ではない感じになってしまうので、私としてはあまり「支援」という言葉は使いたくないところなのですが、かといって、じゃあ何と言えればいいかも悩ましいところではあります。

平野: プロとして福祉の仕事をしている時は「支援」の意識でいいと思います。でも、ボランティアの世界というのは必ずしも、してあげる人、してもらう人という関係ではありません。私たちが経験がありますが、被災地に行って話を聞いて、逆にこっちが励まされることはいっぱいあり、ボランティア活動の面白さとは、多分そこ

と思います。プロの仕事では、援助者と援助される側という関係は絶対に逆転しない。これは医療もそうで、医者と患者の関係は逆転しない。

ボランティアは、お年寄りと話すなかで安らぎを覚えたり、幼い子どもたちが和ませてくれたり、しょうがいを持つ人たちに励まされたり、その相互関係、相互作用で成り立っていると思います。そこがボランティアとプロフェッショナルの仕事の違いです。

現場でよく聞く話ですが、効率的に仕事をテキパキ進めるホームヘルパーさんより、多少仕事は遅くとも「無駄口をたたく」ホームヘルパーさんのほうが、好感度が高いと言います。ヘルパーの仕事は時間単位で報酬が決められているので、所定の時間に決められたことをきっちりできるヘルパーが優秀であり有能なのです。でも、利用者によれば、そんな仕事では自分が「もの」に思えるんだそうです。一連の手順に従って処理されているように感じてしまうという声を耳にします。でも、仕事ならおそらくそれが正解です。無駄話は、相手を「人」として見ているから出てくるものだと思うのです。そう考えると、ボランティアで一番大きいのは対等の意識を持つことじゃないでしょうか。

中川: 私が牧師になって駆け出しのころに、病院の実習でケアユニットに関わることがありました。1人の患者さんに対して必ずチームがつくれるんですけど、そこには医師と看護師のほかに、チャプレンとか、日々お掃除をするスタッフの人が入るんですね。なぜなら、そういう人たちは情報を持っているんです。患者さんが何に悩んで、苦しんでいるのかを身近で聞いて一番よく知っている。そう聞かされてなるほどなと思いました。

私たちチャプレンの仕事の中で大きな割合を占めるのが、学生たちに話をする事なんです。実は、その元になっているのが学生たちとの雑談なんです。だから、このコロナ禍は、学生と関わる機会をほとんど持たず、語るべきメッセージをなかなか見つけられないという苦悩の時期でもあります。

キリスト教の世界では、最初、教会は「Church for Others」、他者のための教会という標語を掲げていましたが、いや、「ため」というのは随分偉そうじゃないかということで、「Church with Others」に変わっていくんです。でも、「ともに」というのも何かしっくりこない、新しい言葉を模索しているところです。医療でも、キュアからケア、ケアからシェアと言われているように、対象ではなくて、分かち合う関係性が大事なんだというのが、今、改めて問われていると思います。私は「お互いさま」という言葉が好きなんです。困っている人がいたら自然に手を差し伸べ、自分が困ったときはためらうことなく誰かに助けてと言え。そういう関係はすごく大事だと思いますね。



中川 英樹副センター長

藤橋: 「お互いさま」とか、「分かち合うこと」。ボランティアはそういう相互作用に基づいているんだという認識を、私たち、ボランティアに少しでも関わっている学生から発信していくことができたらと思います。

平野: 今、発信するということを言われました、これは今、とても大事なことです。ポスト・コロナの活動はまさにこれです。今の状況は、みんながみんな助けてほしいと思っていますよ。誰も多かれ少なかれ、精神的にも肉体的にも苦しいし、何とかしてほしいと思っている。でも、助けてと言えない雰囲気はありませんか。突き詰めていくと、コロナに感染させられる「被害者」、周りの人は感染させる「加害者」といった意識があって、できるだけ関わらないほうがいい、ふれないでおこうという社会構造になってしまった。

しょうがいを持っている人がこう言っています。今までは外に出ると、「切符を買ってください」とか、「目が見えないので代わりに読んでください」とか気軽に言えたのに、今はとても頼みづらくなってしまったと。下手に接触したら感染させられるんじゃないかという空気を感じるそうです。本当は助けてと言いたい、でも言えない。だからこそ、発信することが大事だと思うのです。助けてと声を出してもいい、逆に、手伝いましょうと声をかけてもいい。そうしないと、社会はばらばらになっていってしまいます。

私は、やはりボランティアの現場では、お互いに発信し合うことが重要だと思っています。一番厳しいのは、困っている人が SOS を出せないことです。それを避けるためにも、私たちにも発信し続けるということがこれから求められます。気にしている人がいるよということが相手に伝わる意味は大きいです。無視しているわけじゃないよ、ちゃんと考えているよというね。

平岡:私も、そういう思いが現地に届けばいいなと思って活動をしています。

平野:リアルでのボランティア活動が難しい今の状況で、オンラインの活用は意味のあることだと思います。オンラインには、時間と場所を超えられるという利点もあります。例えば、陸前高田と新座と池袋で、その場にいながら同じ時間を共有できるわけです。この強みは活かしたいです。ただ、やっぱりオンラインだけでは実感を伴わず、バーチャルになってしまう面があるので、そのバーチャルを超える工夫が必要になってくるだろうと思います。例えば、一言手書きのメッセージを送るとか、それだけでも実感が生まれるのではないのでしょうか。バーチャルでありリアルでもある。コロナの時代のボランティア活動の新しい可能性がそこにある気がしています。

平岡:確かに生身の人間が見えることは大事ですね。うちのサークルで以前、女川の方とお話をしたことがあって、お礼のメッセージや感想を先方に送ろうという話になりました。迷った末に、結局 Google フォームで文章を集めて送ってしまったんです。多少、集める手間がかかっても、メンバーから直に手紙を集めて送ったほうが、向こうとしてもうれしかったかもしれないなと思いました。次回から考えます。

藤橋:今のお話を聞いて思い出したことがあります。国際交流のイベントで、私はミャンマーの女の子と友達になったのですが、後日お手紙が届いたんですね。頑張って日本語の文字を書いているのを見たときに、とても温かい気持ちになりました。少しの手間を足すことで、温かいつながりができていくんですね。

■ポスト・コロナ時代のボランティアセンターのあり方

茅:学生支援の場としてボランティアセンターは何ができるのか。昨年までと同じというわけにはいきませんが、学生により近い場所で、一生懸命耳を傾けながら模索していきたいと思います。

平岡:学生から見ると、大学の組織ってどうしても固いイメージがあるので、少し柔らかいというか、接しやすい雰囲気があるといいなと思います。ボランティアセンターも、腹を割って話せる感じの存在になれば、学生の意識もどんどん変わってきたり、興味を引き出せたりするのではないのでしょうか。

小沼:学生のときにボランティアセンターを利用したことは全くなかったのですが、今日は発信というキーワードが出ました。まず学生にボラセンの存在を知ってもらうところから始まるのだと思いました。あるのは知っていても、それだけの学生も多いと思うのです。逆にコロナ禍の今だからこそ、ネットを使って今まで届かなかった層にたどり着くこともできるでしょう。新しいことに挑戦していくといいのではないかと思いました。それは自分の仕事も同じで、今できることを見つけてしていきたいと改めて思いました。今日この場に参加して、立教が母校でよかったとつくづく感じました。

中川:立教大学は、大学を学生が「自分づくり」をする場と位置づけているんですね。その中にあるボランティアセンターとしても、やはり一人ひとりがなりたい自分になれるような支援をする。それは人との出会いだったり、経験だったり、引き出しをいっぱい持っていて、それぞれの学生に合わせてオーダーメイドしていく。ボランティアセンターはそんなふう機能していけたらいいですね。

平野:阪神淡路大震災のあと、ある牧師さんが東京から支援に行くときに、ろうそくを用意したんですね。周りはみんな猛反対しました。水がいい、食料でしょう、いや、お金だいろいろな声が上がったんですが、その方はろうそくを持って行かれたんです。現地はまだ停電していて、そこでろうそくを灯したら、これが現地の人たちにとってのものすごく励ましになったんですよ。暗い中でろうそくが灯ると、ほっとするっていうんです。ろうそくの光は弱いけれど、熱があるでしょう。暖かさや明るさを感じて、ご飯を食べられなかった人が食べられるようになったそうです。

この話を聞いて、私たちのボランティアセンターはこんなふうでいいんだと思いました。世の中が明るく輝いているときには、ろうそくの光なんてほとんど役に立たないけれども、世の中が暗くなれば暗くなるほど、小さな光が意味を持ってくるんです。今はコロナ禍で社会全体が大変な状況にあり、だからこそ、小さい光が必要になるんじゃないでしょうか。こういう苦しいときだからこそ、私たちは光を灯し続けなければならない。「あ

あなたのことを考えていますよ、SOSを受けとめますよ」というね。

それが立教大学のアイデンティティであり、ボランティアセンターのあるべき姿なのだと思います。そして、つながりをつくっていきましょう。これまでと同じ方法が使えないなら、一緒に考えていけばいいんです。一人の知恵は限られているけれど、色々な人が知恵を出し合うことで超えられるものがあると私は信じています。

茅: 皆様、今日は貴重な経験を共有していただき、ありがとうございました。

本日の話合ったことやいただいたご意見は今後のボランティアセンターの活動に活かしてまいります。

